誹諧天狗話 全

863
68

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』 請求記号 863-68

ガラス使用

863-68

わらやもんじ

序

東京

俳諧之名久矣太史公引六藝之
別流稽諧者謂之爲司馬氏之
弱冠
弱冠
失誠舞俚言以行句脫模
変幻不可窮謂今之諧語亦由古
之滑稽也乎使附文於下活井

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68

ガラス使用

翁者身長七尺米鄰高鼻眼
光燦々人視以異之性少嗜欲
唯好飲酒酔則言出口朱句飄
然有塵外之想蓋平遷無自高
やゝ彼優戯宛放傲清稽賣鄙
羞取譏於世教去不可一貫而

ゝ矣素外為氏嘗受技於
翁ゝ徒点如於談諧頃日輯録
翁ゝ績孫耳孫倒去為段
以著小傳以余知翁ゝ家調清
言於卷首余也道不同何敢與
此標目固辞不可強紙筆和墨

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68
ガラス使用

書ス其端ニ抑余モ嘗ニ將レ為ントルニ筆を

褚先生ニ

寛政丁卯春三月

東江逸人撰并書

笠家舊室別小活ゝと號を後活井と改む先師

蒼狐の號也始め鮮糞と呼ぶ古嵐肝の門人多ゝ

中急あり〳〵曲菴小ゝ〳〵梅翁の真意を傳ふ

旧室の名八浪花小川時旧德より得るとも云桂坊

乾什春来翁各流義を切ふ及んで流淡林再無乃

一列を立貞德派と席を左右に次性直ふして酒と嫌むの

僻あり碁所にして章式吐車彼酒器より出でゝ盃

さるゝ如く長年孫小入る滑稽蒼冒んなるを明和

甲申年七十二年中〳〵世を去る生涯詩句の外人口に

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68

ガラス使用

残る行状ハ談笑又ハ冗漫ハ見聞せし所を漫漫
拾ひ集め号く天狗話と題し置し今寛政乙卯を
三十二年の春を迎る人家ハ稀也此書又邸魚農
多年ハ久しく失せん梓ハ上せ侍ん事を三三年の
さくらハ花ハ随い其さまる中の名家ハ序跋を需く
書肆申椒堂ハ与へ侍る也

江戸誹諧林七世一陽井素外述

就階天狗話

何の素先生と世ハ号る術の師あるなる日旧室此門を
通りかゝりハ折ふし稽古の日ハ多く本刀の書きらえ
例の酒さかんなく何となく心れを引とゝろく掃ゝの陳より覗き
居ハ濃ハ紙を思ひくいやく見事 杯盤を飾ものく浮発
付ハ何ハ心ハ若人達失れを考る男もなるもの中に数く
先ハ出く告めんと せゝハ年ハ六ハ十ハ余ハ
ゝ中ハ高ハ鼻ハ高ハ と酒を和ゝけ義ハ心を透見を
くハ紙ハ息ハ者も立ハ ゝみハ低ハ四周掃ゝ ゝ ゝ ハ賢を
ゝ ゝ 変ハ ハ 苦此方ハ四人ハ中ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ

いひく續いく因ふ入ぬ粉屋ふ面白ふ和尚ん言ふと思ト
き人ふ對ー抽ふ差ふき時ハ時ふ此道も石のけるてるかやうの
出稽古ハ方ー先ふ洋見いてー老のおとひ出ふ行ふて先生く
市立合所ひ自し出ふ此屋軍ー彩ふるとト入ふれハふ合
人ふ目ふ見ふ見合せあく出致ふなる老人もなるふの外と
なのーふなりあるーそのよふを笑ふいふあ内ふふまかせ出立
合もト屋きふ今日ふと出出ふくいまふ出ふふふふ所ふるとて
出所ふきむも又いふふふて門人のうち呂ふ出無合ふ
人ハ大体抽ふふかふとふいてふる方ふふて先此人と出立合賢
ふふれるやふふトふるふふ極出ふの出事出ふる外ふハ先生も
出同様の出事ふなふふ出立合ふふふふふふふふふふ此人も見然

二

なく志ふふふく双方ふ夢ふかけるやいふあや何の苦もあく
旧箱一ツ寸きふれハ忽志ふふを投出ー天晴出ふの内怒入ふ
取ふ及ひーふふふ出門人まて格別の出事也我自ふて
集ふせんと硯紙ふ見ふふふふふふふふふふ

是なるいろくと物語り伝る中に大山石尊大権乃
霊験なる事をいつるうちと耳に入るを聞て例の滑
稽氣さし案内もなく陸子をさそひて亀戸乃
妙義へハいつれの道をゆきくとまよそ大体行なるやと
尋ねるに杖をひらけされハ皆く弱きを体を見るに
大の法師の嘉うく眼きらくしきう根作りの一腰月影に
かゝやき言ふ杖を携へ立さりなのやしゝたるひなるう
見よと亀戸まて八九二里さるとも百度有るへ此坂をゆ
小川町通りを神田に出く扨笠へ源兵衛と申ス一人いらなる
事ハく妙義へハ行めつるやとやうれハ我ハ相州大山より亀戸
妙義への役のものもるとくくと行るうつ立ちり源ハ三百ら

間町内火のもやをハ消ゆ〳〵といひ捨く是なるや坂をやりぬ
有りのものこを伴と云中事といひ只人ちるとなるとひけきそ
法を志こひ見る為〳〵と物訓する男あ人見えかられに送り来
ちり義此事を悟りく迎んちつさもとなるとあ人ゆを利せ
消まちひけきそな伴いの事云く今ハ大ふ為神田に出く
立ちと悟く工夫せ〳〵こ日百度なく大山の納めたカの小さ紀
を外みくちこひ懐中せ〳〵を見帰きふよきを限者きを夫
きをちくこ五六月も法へ知るとと投事きハ女人のやうんと三号内
新下の間うり〳〵かけ入夫より見法をもふ持く知そうふ特道く
まいと逸足を出〳〵迎帰りぬ女人のものの彼木カを拾ひ叔法師
を尋るふかきけをめく見えさるとけきハ叔ハ疑ふ所もなく答る

ちと妙案（の出役なんと杖をひき書面取り帰り有し次第を聞
くるゝ火の元の事なきハ出役ゝ指揮並かゝ石を以て朝夕
屋けゝ評義のよいよく火の元念を入るゝ二日過くも学ひかゝり
けきハ杖石なる妙案の加護を祈らんと石版を基に修験を造
除祓の為なるすゝけるとも也

一 茅場町薬師前伊勢屋と云薬屋ゝ方角無行ゝとく大繁昌
そのゝころ八曲菴同居ゝ有しゝ絶日穀断をかさゝ或ハ早り
ゝ弱退散ゝゝ有も四ゝとゝ町内の当人絶様を引ゝり
なるゝ伊勢屋ゝ前の大流ゝ今ハ（ぜんぜん）（ゝ）（ゝ）（ゝ

仏ゟと有ゝ様

一浜齋先生婚姻の所望ありし頃書の稽古会ありし時分兼て猫を小志ゝ在入門を中迎出発せし小稽古後ゝ酒を出すゝ者小雖あんこふを松ゝひ小ゝ才覚ゝ仏も在小入さるは接拶せしゝ直ゝ上ゝ一席の中より席を出しゝ毎小数句を吟ゝれハ先ゝ白ゝ曰と書く先生ゝ先ハ行事をゝひ出しとゝる小雖なきゝて恨ゝ仏と思ゝ句ハ句論書小於くも先生初見の席ゝ作ゝも猶書体ゝ仏ハ生ハゝ外の人達ゝ皆ゝの氣性を感せしゝ

一ゝと日社中の人ゝゝ松小誘なゝし出しゝ酒ほゝよくめゝ生ハ堀を吟行せんと三冊の岸小書く上ゝ小向小打ゝ

五

仏ゝと迫ゝ稽古の和尚遠ゝぬ方ゝと見ゝく仏俗俗小石連出ゝれ行ゝを毎ゝ見ゝ小見ゝけ我稽を俗しゝ得ゝ而者小見ゝ居しゝ打ゝ行ゝ出ゝ事ゝ出ゝ先ゝ小ゝ行ゝと書ゝ立ゝ行ゝ行ゝ問を掛けしゝ和尚答ゝと小ゝも小席を振仏ゝ行ゝ堀の中ゝ和尚ゝぬ出ゝ法の類ひ小ゝ有ゝと皆ゝ行ゝ先ひく教ゝ西ゝ方ゝ住ひ入例乃雖調ゝ出ゝ出ゝく直を動む内程なく南の方より和尚帰ゝ来ゝ出ゝを毎見ゝく出ゝ行ゝ小ゝ先人を呼ゝ問ゝ答しゝて仏を出ゝ行ゝと先ゝ者の猫先ひと仏ゝ行ゝ今一問答しゝて仏を出ゝ行ゝと立ゝ行ゝ小先ハ出ゝ行ゝ行ゝ頂ゝ行ゝ出ゝ行ゝ却ゝ無なき様小酒も出ゝ抱ゝ出ゝ出ゝ

無理ニ世体ヲ欠出シ申ス人ハ捨ル人ハ
早ク死ル人ハ遅ク死ル人ハ
杖を振上げ乞ハ和尚も仏堂の右へ
左へと逃まどひ行くを見よけふ打矢を射掛ケ
人々笑ひの不思議さ小ハ言ふ間を
見て大寺乃老和尚を只一句ハ責る所を宗旨ハ禅法
ハ高ケレ乞ハ頂乞ハ此度ハ平語ハ高きの処張
笑ふと此杖を振上ル事ハ暫遅ク
と泉の浮ク所ヲ知るハ社中倒ル事叫ク笑ふ

一条蓮台ハ蓮り世ハ一時笑と云る男無垢ヨリの事
さ朝ク乞ハ乞ハ此度と志ク乞ハ小槌の事を笑ふ

席ニ出ル志ク哉ハ乞ハ乞ハ科ハ八重ハ乞ハ朝食ハ
なく振ル事ハ此味噌入ル事ハ元ハ巴の巴ろ
氏箱也此味噌ハ汁を製せん去なる汁の実ハ
ものなれ元ハ乞ハ此度一僕居ハ乞ハ乞ハ
打ル家を商ふ者ハ味入一把付ケ乞ハ
回ふ志ク乞ハ乞ハ云世人物を調ル事ハ価を
きく乞ハ切ル為也我ハ汝ハ一倍を巻さんそのかたるみ
よく洗ひく此病の乞ハ調ハ乞ハ商人もとし
かなく詞ハ志ク乞ハ乞ハ

一同ハ居ハ蓼狐祇貞（後文の蓼と縫祇徳と改む）を訪ル所ハ前ル
ろ好ル道として机の上ハ多くの絵を写ル事ル本

祇園も一時うせるなきハ記るき見る中ハ樊噲門彼り鬱
なりとこそ繞かるもハ合せ見れハ格別ハ細く出来そうなるハ
自分もそこの〳〵毎例ハ軍して此繞く破きまきるハ恐慶
一なる時活度ハ三度なるとなる〳〵軍鑑ときく平色皆負ひ
あるうくハ俄ハ張立ちをいひく出ぬ後きけハ麻布日蓮
のやしきハ此茶をくるる日のすし極異の時きハ流石の慧
途中の所ハきまりと思ひをおむ為動ハせしとそ又きた後
ハ社中の人麻布を通りふ茶ハ使して何ひくし
のひし最くる為ハいつ方へゆきるひしと尋ねきハ此
巴浦へ此茶ハまた称ふれ只今中之為氣使ハ出るうれ
れと挨拶むり〳〵早く中〳〵平くゆきるとひく別る此

七

毎度ハ出歩ひるも伏を清きて度又ハ行きとも他の遊り
人を望く別るまく親族ハ已門人ハくを道連を婦ふて
中急ハ連の人此ハ〳〵立ちのうしと言ふ時体く張るう婦ひを
歴く〳〵知るも此逢迎をきハ別を中之ワみハ泥なる場
一記〳〵世毎きるの帽子を贅ひ見せるう殿行の打ち
級のなんとを杖をひ茶ハ亀の字を外仁う豪茶ハ
書うう確さ先くうれハ見ちくいうしうるる為ときを
まく書ハく小かくまるハ見ハ〳〵むさくなりたる
ちとハ考りぬうれと人をと夜を得きハ見せるをこ乗る
殺挨きハ見下のものハ〳〵なくて和ハ駅る事為ひ
きハ右の系縮緬の帯毎織を為ひ皆思

中所〳〵なるゝ絵日脇をとゝ見ハ東江先生の筆跡也
一鄙色少ゝろめむの母郷たゝりてゝろ人のとゝふゝとゝ仕ゝく
箕小路ゝ之ゝ八見たゝゝ都ゝゝの初日見ゝ行〳〵この
絵ゝ方ゝ桟敷百ちゝひゝゝ日近ゝゝ例の氣質なきゝ
見無見ゝくなゝくゝ市川栢莚ゝ方ゝ用き桟敷を知〳〵
ゝれゝとゝもむ初日尚日の事なき八栢莚ゝ仁ゝ也ゝ
今ゝと日二日俳ゝゝのゝゝゝ多入ゝ方ゝ八己ゝ妻子栢の
桟敷なゝゝゝ百ゝゝゝけきゝと見無今日ゝなゝゝハゝの糸
ゝく見遊ゝゝゝ

遠うふ脱さ屋〜と高屋丸酒者何るよ〜中者〜清所と者
何氣なく毒ものとゝ丸ハ一通り野淡の上師者〜ゝ也ゝ此日おゝ
池の魚ふ盗賊方の沖汲家〜者〜方者例よりハ嚴重ゆく
多く賊なゝ沈ゝ人中智り美風なるものハかゝゆ捕く獄ふ
下さゝるゝゝそこ和織を美〜ゝ〜ゝ也員ふ出ゝゝ八無ゝ也ひん
在といふふえよりと正直ゝ一の毎也ゝ丸ハ大ふ強ゝき敵く和合を
智るき人なりと〜者此ゝを少沈ハ明日ゝ強ふ行ゝむも
斗かゝ〜則此和織ゝゝふ者ゝゝく拾く居屋ゝる也

一中鄉魚の中屋安方ゆく所紗の和織をいゝき拾ゝ日働るゝ類
ゝふむゝひ酒のきゝ〜有ゝ丸と嚢中銭なゝ湯屋のゝゝ
ゆく〜やゝく〜かゝ〜加ゝ丸ハ居酒屋ふゝ之者酒者を出ゝゝ和

居合ゝるものふも居也中ゝく面白く加ゝく自ふも者ゝゝのゝ
上ゝ代ふゝく彼和織を所行居ゝゝ門人ゝゝ者酒
ふゆき價を者〜羽織ゝゝ丸屋ゝと者ゝ者ゝ沈
沈ふ毒丸ゝゝ〜ゝゝ又ゝの後者屋者ふゆくゝ居酒ふのゝゝの
ゝゝ也有ゝ丸ハ厠〜ゆゝ〜ゝ毒ひ酒屋〜ゝ庫ゝ者ゝ丸沈
ゝゝと出ゝく己ゝ屋〜ゝ屋ゝゝぬゝ者厠ふ浪作の脇ゝ〜酒店ふ懐中物
なゝゝ〜者ゝゝ屋ゝ者ゝ沈ふ〜ゝく脱ふ沖〜出屋ゝゝ者ゝ
近ゝゝふ毒ゝ幸者ふ知者ゝゝ者ゝ有ゝく加ゝく者ゝ〜ゝ丸ハ門人酒
ふ毒ゝ〜ゝゝ毒なゝ変丸沈ぬ

一毎侍馬町新道ふ住〜ゝ時ハ唐画の所ふ居ゝゝ〜花古美術
ふ伝ゝえゝゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ〜ゝ在ゝ〜ゝゝ丸ゝ酒徒也者在者

の時ハ手ぶくろのむすびハ破れく幸ゐる仁の事ハ貴次服立ゑ
花古ハ注上戸茶屋ハ笑ひと戸ゆく破町のうへをかより
見る時ハこまをとりき皆人絵うりのうる絵吉ト絵ハ持佛
なり法令の事なきハ文ハなきもいうる也我法絵をかきく事
きゑ一といくを更ハ大業也たなをそのうまてもはしふさくかきく
ゆくれうと新をゑ一ウ日雅次唐紙一ちのハ大きく書てめて
絵をゑるを却く絵の和收ひかさくとハ中作りしう実ハちき
なる方をゑかく有一也と聖ハ法くハ仏壇の代りとせりを
ゑろ仏易き人和人全絵を消へきを事有てひうけふ立
長けをふをゑの仏一せうハ甘一ゑをきよをゑふ
六七枚ゑうをゑくいぬ枚く絵物を元よせ彼像へ押ゑを

十

けきと大幅なるとけきハ全像ハ宝を面相より実かことを
花くふ垂ゑる素人細工絵ハ姫のをなれハ不手際いをむゑる道
されと絵ぶちの法絵と号一念一仏ハせきうう鞠内田
絵丈ハ絵人拵をとを

一ゑる日門人素のなれ門ちくく恥絵乃古実を尋係ゑるハこを善
例の言絵ゑ也けきハ門人の日今甘一低く作られよ和面ハ人
や竹ハ中せを義笑ゑ見ほをふやくくを絵得なき方も
あるハ世道絵仏ゆくを立竹きゑる人ハ絵勝也学道ゑも竹せを
事とやきれ

一田舎より江戸ハ出る商人義ウ題の懐帯を新まれ歩ゑるハ
義対面してなるとをいの事ゆく出ゆ人ハ必用ゑも多ゑを

ばくん幸ゑ合せ仕ぎハ昂踊ふいて進まゑ侍へ
うゝむとゝく酒者なと元酒へとゝくなゝるふこを男も毒腹ひ
玉ふ帰りくさの幸社中へも吹師けとこ度又懐帛を
拭ゝ日和れれを屋く恵く此ゝるゝ紀のめく昂懸
ゝんや墨なむ取りんと行けなくゝれハ此の外後之新蓮
流ゝゝ懸ゝいゝゝの方振ふ昭くゝゝ出る幸ふ非を昭首
江戸を立直帛懸なくハ自ふ勝手懸ふ向い法和手方
なり二三日をるゝく来るゝ屋ゝと先達くふハ仲ゝ行る接校
ゝるゝゝれハ旅人なゝきれ帛く立ぬいゝる時ふ有ゝん
一依係元訪ひゝる時例の砂新なゝるゝ懐帛をゝろけ
十ゝ重見ゝ此句岩中ゝくの悪句ゝきふ徒ゝ出懸をも無ん

ゝるを我言懸也且評をなゝ系ふ帛を用ひ青赤の肉をゝて
押をハ迫世の幸ゝいゝ〳〵ハ新連ゝゝゝゝゝ一歩懸ゝ懸の外
なゝ我今日より此ゝふわなゝひゝく指改ふ墨をつけく一ゝを
一懸二ゝを二懸十懸ハ此此十ゝ懸ハ又ゝ新とゝ出ゝむゝやふ
行ゝきゝゝいゝゝゝゝゝゝゝゝ懐帛ゝゝ有ゝむゝ度ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

陣家を窺うをもて専く也於たつハ義より常ハ役をその
後ハ償を拒へ及
一師光の未武武家方よりと祝賀を給ふ事ハいまこの時
斗なりとなるハ義菴ハ在くかの役ハいつやう償ふ者
こまハ一人ゆく煙をとる事を義ハ思ふよき折の出役也
こゝ人多ひを教こ早く支度いこれをいつハ役
迷惑さこハ作出ハ人を左様ハ役人流の
多義いくゆ多くゆ多一通り何ゑ上ゆこなこハ又く
事る角ことハ義次のハ憤りこを方ハ教こる方ハ我門人
なりこを師のハ用を教むく事やハある見怒く煙を出
ゆる角こ我ハさる事の有く神こ也といひ拾く出ぬ押て

十二

ゆりなを人の告めもなりぬ角ゆと役も分なる次
なここ義ハ償と小ここハ緩日煙をなこ事ハ
迫き汚義ゆりなりこの和よろこひよくそこ
これこを我方より手紙ゆく出役人中へ此紙中を
叔見ハ今日の御家人酒ゆくを振出ふ角こと称ハ
ハ元ゆる人こて完義役の物事ゆ同源こ
こるハ彼者こ先ハ仙を弱きおこの出志ハ有
かここる人より上ハ同源中ハ結て出文役人流の
も緩斗へハいこきハも同義と辞退こるハ義曰これハ
ハ角也こ角ハ此方へ貴ここれハ此方のこの也角流人より
下さきこなここ組物事ハ法ハ方ハ貴ハ同角也

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68
ガラス使用

そきをせハえく也煙掃をせしを手け此方の体といひ
く右の目縁を彼の赤ハ赤ハせしとそ
一いつきの此方より彼小脇元を接頭せしを接の結接一通
なるに依ひるの日陽変方より発元彼赤ハ時彼脇指机の側ハ
ひるしを間ハもなき位置故彼の中間法くくと見とし居る
義を体を見くそえ腰の釣好みやたなるもを手ハえくよく
見ハてと指出しそれハ丈ハ有かくくとも私式のものを手ハ色
ハ忍入ハ此事と雑まるハくく遠ハ兎ハ生者くるしかくとと
ひきハ先ハ此兎ハ兎ハ垂きハと押いてきまかくしくかくと
見くく又いくく紀有かくしと元廊ハくるハ昂魅海まを見も
辭さを見ほき居くくと陽絵く義みハ曰を方が根の脇さ

ほしきやと問ハ彼の男右体の此腰のものを手ハ接見仕ハ
事さえ今日ハくくくくほきくくく中く私とも生涯お勿義
ハくハ此此発と中ハ家くほしく思ハ則此猫元を生へしと
元此を中間絵を洗しハ此戦者とハ存なかくもいそくて
風情ハ由を也なくを此猫さを下さしハ事有無く此法
調子ハくも有かくしと中ハ義色を都く者を中ハ那ハ
俗ひひんや元ハ去ル度猫より教頭せしくくくや一去度も解
ハ此ハ此れも赤海ハ今日を方めき鞍此のものハを
めきハ我も甚満足なり長く手寅さへくと与へるハ中万変
の此此ハ度ひいくくを納めくいちくくぬハ方よりの役ハ
有ハんくくく

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68
ガラス使用

一浅草並木町小原伝兵衛住居し時早朝小さきしつらひ四畳位
見世やといふはまづ近所の事も知れぬ行の事なれとおもひなりう
通りなる小時垂れ下り欠時し俄に夜後小なるとうゆ漬
ゐるまひの人と也少乃ひし行時ゐれハやはき事ゐくえなのを也
ゐるまひうりこと後ハ生涯行ゑ又其の方へゆきし時も常酒
ゆく此日ハ朝食せを午時ゐ乃空後ゆかるゐ打ゐ通町のうち
小家の食事をゐるゐ乃ハ法ゐくと入くをゐと年し仮を
振まへといふ素無忽横柄なゐ人品常なゐ者ハれ猶を
上方くゐしるゐのまを行ゐを者しとやふこと赤ハゐるしゐ後早きう
ゐゐしきとゐるふ酒ふまかせく元酒へを中し年ハ肢く赤ゐゐ
食し後門く板をゐつき拙ゐ事ハ活ゐ時四宝と中御諧師也

十四

急ふ元後血ゐ乃中赤ハ少入ハ乃ゐまひ乃方底疑無ふ
礼を述ゐく立けるとそまゐ見も芝乃ゐと製結家へ遠入
月代を剃せしゐ事なゐと乃者ハ帰を乃ゐ画賛を梁め
製結ふ与へ古き大切ふを者し價ふかゐ古ゐゐんと自愛て
帰りぬ

一ゐる方より砂糖泡盛をゐゐひゐるゐ打し陶なゐと乃ハ
就ゐゐ事箱へゐし事ふ彼箱を登朝一滴も如し
箱後ゐく品を何方へ帰ゐ行酒へ事ふ行く翠しゐ
泡盛有合ゐ近所の名酒屋中く代ゐと如者ゐのを
相談ゐるふ大ゐゐん此方の梅酒を拵かへり見へとくを
けるゐこを酒肴の和氣ふ入ゐる者毎中ゐ振出乃ゐ梅酒

くすし梅酒とゝく云書せるを小為酒屋もてゝ小於た事を拵
中やう いまゝ一月ゆもるさるゝ酒價騒しく酒ゝぬ為の家質
ハうゝく初生ハ之人動無なるゝ事と仙術ゆる小医師とたゝう
ゝ事ハ害なるゝを告ゝく小ゝめぬ

一百菴百人一首を諸ゝる小為ゝ居近ゝ付ゝ事ハ屋小出ゝ人と云小
ゝ事ハよゝきことゝくしめゝ人ゝとてこゝ日中ゝなゝ事ハ絶せゝ一ゝく
好ぬ武家町家の人ゝ俳徒ゝく叔藤沢小かゝとゝゝ百菴ゝ
俳ゝく引書多く物ゝ物を元廣けく弁小仕せてゝ中ゝ居る先ゝ
天智天皇の歴代朱北座のゝ為なゝきゝしく夫より秋の因乃と
又文字をよゝこゝけ為ゝ秋とゝ小字小仲冠をつけゝゝきことよゝまゝむ
見大形る誤りなゝと萩ハ小草小胡枝又天竺花と出ゝくなゝと

ゝ事小用なゝゝる事を引ゝく諸ゝゝゝ事ハ強流少書小事
屋ゝ事中ゝなゝ小ハ各退屋の色見ゝく或ハ之用又ハ之稜
為なゝるゝゝを つゝく いまゝ之の一首海ゝるゝゝ居くゝと小為と
強ゝ少小なゝゝ事ハ為ゝ之ゝく清ゝゝくゝと奇見事を脇へ押のけ
居ゝく強ゝゝ事の後師と我知為ゝ又後日ゝゝん出ゝくゝと
之ぬゝ事小為合せゝよゝ笠光出語ゝ也

一大仏馬町為ゝ菴の近所ゝ出ゝゝゝ門薬屋小酒を入
雑ゝ出我宿小ゝのゝゝ小を清ゝくゝと見ゝく為ゝゝ事度以前を
知を親類社中家ゝゝゝと大小事孫ゝゝゝゝゝ小ゝ薬屋と
拵ゝく上列の方へ為なゝく之退ゝ由彼地より告ゝゝく安
居を知ゝゝ

一上州碓氷社中有る時く彼地ハ冷しかるに夏富士の社中
とこそ名の川魚さかな出来ると酒ならば茶屋の
町ハ江戸十七軒の出店有るとこそ代官屋敷とハ男通り
かるとなきハ人ハ酒一口と招きよせるく故篇ハつやうさきハ
乳柿の皮毎懐帛の元次まる男也何ゆくも発句しく
きしのとしく砂き名人のと笑をとりとく吉兵衛こそ
吉事の藤五郎と書く月出さしくくやとの藤五郎ハ
田舎ゆく田のさやしかせん為川の藤を作ゆく岩上げ九く
歩行亜をいるこの世行るるかるくなるかなせくロさきし
亜也をきしてしての男を藤五吉兵衛と戯き帰しとそ
又翌夜富士ハ雲ハ日数なるとく帰るかるる付雲邸也

十六

いるるもの、従者ハ送せはるる世をの云篇帰りるハ打ハつも
くかのき送ハ第ハきるなり後の変ハ伝へまはるき孫
行を書くのるるしと郎ハ酒のきくんハふところ帰
元出して青柳ハ先くよるくなるくよ孫
一名のるるなる角ハ同玉孫ハ大文上尾のいるる出名
まる書帰きハるく呂郎とるる中くハ松原の陰より風吉ある
男三人を出く篇後ハ塞るる世方ハ中急なるく浪く乃
月とハ今日の事ハきる合力ハ訳りるとハ斜為月
郎ハ見きハ丈言くやせきにるるハ低く肥るる月代
出くなきる衣数ハ大小を横るくるる篇るくるきも
なく浪人の出月となきハ出雑兵の事なるいさるなるる

見事を爲しと爲目一線を出し与二人目と目を見
合せ聚せしの中に男女共に男女なる男此方を合力を与ふ
乞丐非人同盟の段方寺怪多方也早く百行の路用を出せ
爲と氣色を窺ひ中せハ爲かくと笑ひ合力となる
かゝ分分相應の事を段事永なしとハなく却く盛憤の
体仏得ゝ我も人命投助を待く通るものなきハ此一線
の生き事富家の多合力も稀生命を勿論分合を探所迄
多くなく人なき時ハいくせゝやとつるこゝ面男猛なる事
十人中に敵すべき勢ひ彼者と常体の好仲なるや
おもひ名道をもゝ通ぬ胡酒の元氣者又探事の
なせる所也怪くも不思議の事也

一赤坂長瀬谷色小画の少女なる出方ひ子息養孤門人
小く爲をと拵き所との事なる見ハ小と日同道せ小美
もこと屋小出ものハ爲ハ絵好きのよ行を慶小考ゝ為ら色と
有見ハ怪きる氣多なく小ゝく小なる中小こ遠川の娘ハ
少く小叫ハ小拵る小く小き事しる花ゝこと
同ゝ小見ハ先年伊勢小く見探出の男小く小ゝ仏小美
居く見小生徳ものと探出ゝ好く出事を仏和也と云人くを
無我なる事を思ふ

一狗迦小蒼洞とゝふの有爲此湯ひ小く方へ行しゝよほと
ゝき探唾ゝて帰り道の酒一行を酒迦を見ること迦の酒店小
蒼洞迦有多色ハ彼門小陶拵洗ふ大盤切の水を出して

いさ清めの人とハ二を示しとひて盥中一呈を入ぬ下雅さ
大ふ後立告めるを書洞泥破のよしをトワむ抜きふ法ひ
くこを郎ふ入しの此孔ふ画賛ゆきくを第せむ帝半の人と云ふ
うせの花ふし多を書しを迫くふ有ゆる蘭ひとの事去一帖
出しめるを彼きゆんふ任せかくほくふ一帖ふ始もなく書
ちうしけきハ書洞きのくふ松を人とも見無なく御をう
半しとう

一

信鳥慢ふ馬所とひひし人ハ古亂行門人みく世ふちうまる老人
なり家と八文同門ちくるく賜い御ゆをゆるう此人書扶の二帖
寿ふ去称義の絵あり家見ふ賛せんとをむなるしいふを
示ふ見ハ絵柄堅き衣表衣補てるかゆんとなるふなくそれふハ

十八

説句の賛いて絵和ふ同筆の竹画あり迫元半重屋き
代賛しめたきよとひふいうもと諸しゆう弥所しそのの
表御と類しふを画賛の発句書ちゆをれた御文ふ起く
はたをふさ西大筆ふちうめ表所方ふ逸御をしと也又ゆる時
弥きゆんふくふ易き経師の方へ中きしう仮源ゆ行道画ふ
ふと発句のうかうしかハ有ひふ硯の筆ちく猿猴の行袖をし
秋の月と遊ふふ書ちし陸と出ひゆを此画ハ去屋愛よりを
ちしめく表具仰有しなを条ハ弘ふく言を見分大ふ
弥きとやかくおとくもせんを屋形く早く屋敷へ出有の俳を
清ゆを倦ゆるふトけしへの了簡ふも及ひかくを人の陸笑ふ
入めるふ旧宝事ハ兼く竹しを老人也弥文句も面白く出来

為る侍仕立の男共出でへと仰あるれハかるるの人も経師
も大か安坂し日ゝ次出業の上物を第〳〵るか雑の和歌を
叶を経師長く出入か仰なら者〳〵とう湯かたやまちの
言葉とハさまてゝを上作らん為

一常か出る方へ玄関可ゝく出門を入ゝ者と番人も第ゝく
知者ハ歩ゝ通〳〵ぬ両隙静なる日なる〳〵ハ玄関ハも
諧合る人なく又方かなゝく番の人見ゝるか玄関乃
隙るより妻恋の方へ泥か如〳〵面見躙出〳〵ま男ハ内師く
言鼾の者有ゝ者立者ゝく見るか為なり者ハこハ無る
事ゝ乳目さ帝〳〵為ま〳〵と申ゝる起〳〵ゝ行碓ゝ乳ハ
ゝく〳〵と上るゝく休見なる者又次向か庶あゝくもゝ世ゆゝくとハ

庶為まハゝく寝ハ表向ゝ外ゝ仕ゝ者ゝ中せハ
さゝきハよ揚ゝもさハ寝せ〳〵ゝと土見あゝくゝんも源ゝ者ハ見ハ
外か供待役させかゝゝ斗孔通り者ゝゝく臨眠ゝ〳〵と
面もかゝゝ中せ〳〵ゝ為

一赤坂ゝ者ゝ出大名か出序有ゝゝる〳〵か百員湯尾の上例乃
泥碓あゝく送ゝ人を堅ゝく改ゝ出門を出〳〵ゝ夜の表の月ゝく
辻番の側なる松の枝ゝりいと松〳〵ゝ〳〵ゝ者ゝ者ハ者ゝ者か参ゝ
ゝゝゝく置ゝゝの暑ゝゝ為ゝゝんとかゝゝくゝてゝゝの不ゝ
横枝か見ゝ歩ゝゝ者ゝく〳〵ゝ景色や昔熊坂長範ゝ物見乃
松と申ゝ〳〵かゝる眺めゝ者かゝ城ゝ者ハ風流の為ゝ孤之
ゝの為ゝ者ゝ〳〵〳〵慢ハ強なゝ〳〵ゝ〳〵ゝく〳〵と現ゝ出ゝる者ゝ〳〵

当人の只一遍ゝ見せけ何そのあや番所の松ゝのほるとく
ゝる夢を狼籍ゝ方早くゝるへゝとハるゝ翁うゝくゝと笑ひ
ゝゝ方ゝゝゝゝゝ口ゝゝ行者とハ恵弁玉極浩ゝ坊旧宮也只ゝ
此流序ゝ行ゝゝゝゝゝゝ暑加ゝゝゝ友此所みゝく納涼ゝる
相撲ゝ取ゝゝゝゝゝ当人ゝゝゝゝゝ嘔吐きゝゝ是ゝゝのゝし
酒を彼此の天恵へ吐ゝけゝゝゝ当人大ゝ弱き周章行ゝも
せよゝ引おろゝゝと置る夢ゝ追ゝ格ゝ引抜出ゝくゝゝゝめき強く
を除ゝ人変身失ッ嘉くいゝゝゝほし今日市原浦ゝ流潮の
此宵有しゝゝゝゝ内の宗匠ゝゝゝゝゝゝ

ものゝ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

支度をきハ今一人ハ先程中もなかるとゝ孔と申ゝを不牙搖一ゝ
義ハこゝ程ゝく川ゝ申めハ西人中やうこゝを組ゝ上ケゆくゝハ
淵くゝを泥ゝ如なんとゝゝゝむ義ハ行ゝ今ひゝく彼芥川のまゝ移ひ
をなゝゝゝ也油の我めゝゝ事をいゝゝゝ孔むやゝゝく孔ゝゝ
ゝゝゝ泥ゝ孔ゝゝなゝゝ行ゝ面白やゝゝゝゝなゝゝゝひゝ
文ゝゝ道くゝゝゝくゝゝ物ひゝゝゝひゝくゝゝゝ行ゝ偽ゝ町の
庵一ゝ西ゝゝゝ帰ゝゝゝく妻を抑ゝゝ僕孤蔦ゝ夢ゝゝく
かくゝゝなゝゝゝゝゝゝ帰ゝゝゝくゝゝゝゝゝゝ

亭主なる者ハ半紙を引きちぎり
ひいの字なるを一ツさき久しき
ものゝ中ゝ小さくふたを起こしたるふ
思ひ二寸の小袖を着し
伴ひ出るを取扱ふ所を小ふ所をせ廓内ゆきり彼男の
中ゆひなる横ふ登者ハ起き上りくのもの
けるふ表ハ丑三ツを過ぎ義も例のぬくなきハいさとて座ふさめ
ら者ハ出るふ彼紙衣の者のくいさくとさるを夢ふふうるさく
や有ん是ハ〳〵踏めき上ふたるを小くい移ろう表なん
とも紙と大碎なる者ハ起を連の客ハ出ふ急ケハ出る者ハ
出るふ酒と目さめ起出んとおもくなるとふ人目多くそかの
破紙衣ふ出るを〳〵むくくと立上る泡の姿見見とと上下ふ
笑ひ常引きもひ出るを横上ゆくくく笑てりとて又なるあ

所ふ出るふ酒の上ふ中狩ふ歩して大門を入るふたゝ
もいる時刻ふ及ひ者ハ出ちく灯も消一戸も引よせなと
出る中を江戸廓を知く女郎屋あると部屋を見給ふ者
ゐるふ者の影ふ有ん心差ものゐるを見をひくく引
入ぬ表二階へ通るふかの男の知く出貴の通路くを出引け
女郎屋今二人孤りゐ中ハ出老伝の御ふ出屋のこと見
上ケ〳〵ハ行とそ二人とも出上ケ出者ハ是れ〳〵といふ義皆く
驚て元廓恋ひの情ハ出るも差も表を帰るをそ
を因ふいろく出ろ〳〵ろもをうとなる事也今月我
一方金の部ふ駅なり〳〵者を二人といを一人上てハ早ふ落る
なるかく懐中を吸して八完ふ無なり一方ハ兵衛ふ者を

く今まで男が女に浄更が物屋敷などなる事

一酒肉を換ぜ〳〵あやまつせ大小血せ〳〵が生臭岳ちの方丈
ゆゑなりけるく国こ源うをけきハ彼寺が招き朝夕獅のこと
数日医業業せきせ亦きつ小御所の地よく水庵が浄巳ら
久くなるとして社中小体そきが小の廊小切々るが碧玉砂砂
して厠小ゆき踏たり〳〵落こう皆くく周章引上ケ小浄を
洗い物〳〵きと少こうく臭氣去こうかるなきハ廊下小ゆ
発が酒こうく為よとひこうく左右の足をも〳〵洗のなく
拭きかけこうと見ハいこうる事がやとくく拳拳々孔ハ書面
こうこの厠小なつさハる時ハこ道具を酒がく清む我々が実
小なきと聖ハ又廣〳〵の市鍛〳〵もまかるなきハ拭きが微ふを色

一永国寺といふる浄寺をきのこ酒無小第〳〵なくとも
ゆがむけハこうきの市蕎なるもひハ白豆徒還がくも浄こう文
生きを文ハ文祖の中子也彼家のなるひとこうる事をも義小ち
色きを数えけれハこうきとも見をきでこうるが中文こう云婆人
こを新次代家面小於くハ仏授〳〵こうとくく文をよく学〳〵他
小仏〳〵むなこうの仏御もなり呉自分の徒然を慰こうのこ
の事也仏ハこうる〳〵かんとて又夏雨降こうるやうこ孔
沿ひ〳〵小雅饌のこう秋瀧を好〳〵こう事ハ文本小こう御小
なるこうきを以日の雨小くいつも出こう孔ハ文十小くハ女
名をなる在響古せんとおこうる小ゆ孔こうき師なり初色の用小
なるハ引今せこうきよ志〳〵師の仏小入を習ふハ世無なる

此方の猪を次第に限く法が笑えるこそ迷ふ
ものとは世に生きるいひしもさるべき事そう

一今原真屋八幡宮に住し有福の高家なれども
浩測の門に入る曲測と云後改て真山と号ひ
と為く世列に加る宗門は法義弄ぶ先祖は日蓮上人の
大因縁のよしを聞くいやしくも分倫中に生まれて乃
誹諧歌者を見るに中古の門に武門を通き又は風流の業に
世業を譲り已に業にして遊の老るを考ひ意
師と称し判者と仰ぐ同流或は同志侶を結ぶ列も
定まりし也今世は古の如く風流のよに生れ貧福を源内
に八幡に稼ぎ歌者となるに好き衣を装ひ

人多しよて高者の法師に出ずしも世に
有るそなる日蓮真屋ものに分れ易き方に
法師を招くに法者なるよといひおきせるを真実に少
のそんとのに真屋我既を初次さる年に
かるものと蓮我も同様なるを静めるよき所行
遂に神に到ると紫に生人家に
ゆき移ず既も既に出ぬ故に人家に
ものに蓮真屋なるに一曲を聞ものを
一曲学ぶ所と学ぶ家に去るとき謝用なるしを
そなと言まてうり生所中もいさのと引るに成
打角得ぬ者ハさきれいひもむ者入を礼もそく

中てうぬ門にを出るやいなや敵くをうかゝぬものなり
矢叺ハよく今一曲少うむとハいそれ〳〵事よ方角寸法く
程ハそ〳〵めよりとなそ〳〵ろうぬうの他弟子きとりせ〳〵と
好のよ〳〵ゆく詩きつるう和尚ハそ〳〵ゆくれるなと
なのきハ第方少うるやうゆも芸用きてかゝ〳〵ハ思ハさるし〳〵
そと少人ハいつきも威芸四〳〵法師ハ胡蝶也弟一万れの
いう〳〵方とそく次の和後そ〳〵そ
一なる時義見別さる戸義をきけうう方屋こせうくとそ中老
見ハ蔚絵と云吉ものいひ中〳〵迷世の物ふなるをなつをを
道具也和尚面白なく〳〵ハ程なく発ひ玉そむ俗程お濃れ
よこの〳〵そ〳〵也ハなく〳〵ハ弱冠の時盗ものと製きふや

けきハ此戸義調〳〵なる又ハ外をとそひ〳〵なるハ中度乃
四好こ仁の名惜もむ見ハ惜沿丈う秘義なるを当ふかを亜ふり
ものく破弾方とも盗をかるまし〳〵也丈より足屋物今の度毎
言者の席とも〳〵ハ貞度此戸義必ゆめををるなと一度く
弾とくるう〳〵の程いつちゆを義〳〵まうくん見〳〵なるめと
なる

一流儒弱元を好める美人園車（後巨山と改む）とふ男を新義を拵きう
度小清き一通り接拶のうく先注者さ〳〵〳〵〳〵ハ敬く流〳〵き代
多く志感吟いつも〳〵也為〳〵て弱元ハ美きうちの事を徳分
四出情ひつ〳〵園車ものもさ〳〵ハけ〳〵す人義角美人のせ〳〵
〳〵者中を自称と弱も多くかつ〳〵ハ園車こを者を

而已にしてめより見るゝ所あるに初心の句ともおもはれず
右の句とハ大ひに異なれども横目に彼者を見るゝ又曰
美人の生ひ立ちハ格別奇なるゝ所ありきハ都て是れ
とハ大概の生ひ立ちの事也と園車をうしなひ場にかゝるに
一義老ゝ後ハ美人ハ行ひ澄まして清潔画の大竹藪野
上ハ彩色の御こゝ続きに連疾鬼を画くもうまくふ迫真の
元今世如何にこゝ居の表ハこゝ来て同じ事なれ共師と云る謂也
なるに美ゝ分まかりこゝる稚ゝ父の名を継ぎ一ゝ極めく
病身如何ハ親族の人義ゝにに不幸ゝ云ふ稚きこゝの不人
の名を生きハ多く然ることゝ成る事有師匠もよき名なりハ
望ゝ生きこゝ者也と申せと義元の所に成り名を

生きと為ゝ所の如く徒ゝに不生きせハ何を名になんと成
こゝ男義の如く風流人ゝにに成ハと何ものと好もこゝる程なおく
何の張ゝもよろゝかんら此児柳の事のよふに人ハよく然
今こゝる名を考ゝ所ゝんも宜ゝ考ゝまても
なく柳ゝ師と加申ゝ和お数もなくゝ多也と万語世
遣化如ゝ生ハこゝ人も元今ゝ小ゝくゝよろゝき日を見ゝく
又ゝ義ゝて帰ゝぬ義ゝ如ゝ時ハ父の家富家之
名ゝ成美今多ゝく土産ゝて他の生ゝ者ゝ成ゝ
生ゝゝ生ゝ質を思ふ後ゝハ我極めゝ生家の財を減さむ
是本ゝ不ゝゝ成ゝ此ゝ成ゝ為して帰ゝ成ゝ有福乃
親族多ゝ生ゝ生ハ是ゝ生ゝ安中生ゝ成ゝ不

高家を通ぎ只人の作ふ生涯を行ひし也

俳諧天狗話 終

附言

此義生涯の発句を挙げ八文車の七車ゐも積ぶりぬ
多きゝ只時ふ除く打ふ書くつひ出をかいもとめあされハ
惜むらく今ゐを石見と埋こ錦繡を荒むしろ小袋
拾ひ多くるへ実ふ深きを六十餘章八謡ふこを九年ゝ
一毛ゐも及ぶまきなくゝ又拾ひ集る志の人ゐゝハをれゝ
程ゐもなくんゝと上のゝゝの後ふ所作る事ゐく
なし也

活井蕎室発句

春之部

日本記や天地一枚昼の表
昼る間ゝ仮ゝ新いゝ江戸の表
年の内より留ちなをれハ
我者ゐく戸をゝ閉せゝ去年とゝ
ゝ居ゐく点置中ゐくゝ門日新
蕎麦ゐも行ちゝひ出よ蕎ふゝ
うゝひを和日を引伸を春の中

鶴の画

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68
ガラス使用

夷俗を書せるを人々甲小文字

門人寸寄鶴洲作るを見るに

雲を踏るかゝる山乃笑ひ乳

雨なくて色うせる寺々柳陰

接木の桃桜

伊波屋鬼ゝ猛ハ清ゝ梅花

稲荷の額無

ゝ年々蹄の跡乃まむ

名所の蛙

蛙さゝいゝ世小生ゝハ

達摩の賛

已ゝ眼の塵ゝ

目ゝ寺ゝ清ゝ見ゝる

蠅ゝ

海棠ゝ眼ゝ馬の上

夏ゝ部

唐のゝ清々ゝ

美女の賛

神ゝ待ゝ

猫の賛

牡丹ゝ眼ゝ女ゝの

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68
ガラス使用

雨雲のかきくもりて初秋子
　帝貸の賛
我後ゝ[illegible]帰ゝ帰る月
　久蓮平内の像ゝ
去なから後を吹きし乳夏の月
　人きうあ氣をとりて来しの
　風土記にこの後蓮ハ
見ゝ人も[illegible]急かちなるかゆとう歌
蓑笠ゝ[illegible]ハ[illegible]五月雨
　大象義七の賛
昨といひ鬼ともいきれゆるの花

曲庵十二面
河骨や[illegible]向ふ[illegible]
会歓ゝ[illegible]日[illegible]の蓮白拔
　生广の賛
此[illegible]破ゝ梅雨の吸け
柳ゝ自由なるあ[illegible]れ
暗ゝ石の[illegible]ま[illegible]
蓮いゝの[illegible]れ
上見ゝ[illegible]ハ[illegible]傘の下ゝ

秋ゝ部

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68
ガラス使用

孔夫子

豊年を志をとかしのやくまうく

餞迎の歌

蓮の実乃孔子年ゝ不おやちる

猿の歌

掛くとなき王母の園ゝ盗うして

萩か発の絵を見ゝく独吟を

自ら見ゝ酒を孕むや萩ゝ

人間の古きハ加よ半絲なるひ

むら鶉の風ふよきゝる縄ゝ

爲まて名聚させゝるきめゝ

名自や名のその渭ゝ

爲ゝや絲ハおのゝ吹ゝ

我皇を山の塔ゝして自見ゝ

名月や年なし山の主ゝ

六祖賛

嵐雲ゝ八月も猪の邪

関羽賛

農ゝ難も穂ゝ出ゝ秋の月

美濃路ゝ

名月を物見のまゝくめゝん

野酒ゝ舟ゝ指ゝ

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68

ガラス使用

祿院ふ拓を作る
新蕎麦やものゝもいとゝ次第一物
まつらせるものもなし一茶の宮
万句無り
みさと茶いゝき拾る旦こうれ
達广賀
冬とつく隣のうゝ壁の完

冬之部

志ゝれきやさの茶かをいのうゝ春
傾城の賀

所ふかく幸皆うゝ冬よ接事ゝ
木ゝうゝゝや大津八町年の底
おうゝゝゝや畢きる馬の脊八塩山
頭巾茶ゝ茶かゝけをおされ敷
恵方頌
賣買ふきる冬十月廿日長
陸稲の賀
世の塵を清るゝゝの秋うれ
初雪や拙木車の途中より
降中を咲せく茶る屋蘇朶の雪
杜夫魚の水ふきなき森冬れ

[illegible]
年[illegible]や波の立居の後[illegible]
豆葉万句無[illegible]
[illegible]と引[illegible]や山蓋の油
賣殘る[illegible]を笑[illegible]む年の市
酒といふ妻も[illegible]年の奥
年既[illegible]の[illegible]道
[illegible]や[illegible]
行年や一万三千五百息

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるものはあらそひ
うくおひたちそいぬ
あらはれそこのみ
ほのぼのとそこ
ひとやよまれふなわりぬ
いまそのちそのまはちまとる

人なくまあくまをそこ
えのつくなの社うし谷のおまれ
あこの人をみ歩ひてかまつえん
あるうひまをかれるまち
ちそはちこそまれそのの
やまはあのうれるをそて

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68
ガラス使用

863
68

世五
雅口

14125

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『誹諧天狗話』　請求記号 863-68

ガラス使用